

使徒の働き13章13－25節 「ユダヤ教会堂での福音」

1A 過酷な旅 13－15

2A イスラエルの約束の方 16－25

1B 約束の地への導き 16－19

2B 王を立てられた方 20－22

3B ダビデの子イエス 23－25

本文

使徒の働き 13 章を開いてください。私たちの学びは、前回、13 章 12 節まで来ましたので、今晩は 13 節から読んでいきます。前は、キプロスにおける宣教旅行を見ました。そして、彼らはキプロスを終えて、今のトルコ、アナトリアへ船出します。

1A 過酷な旅 13－15

¹³ パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。

アンティオキアからバルナバとパウロが、聖霊によって選り別たれて、宣教の旅に遣わされました。彼らは、バルナバのいとこである、ヨハネあるいはマルコを連れて、キプロスの旅を行います。そこで、島全体を巡回しながら、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを伝えますが、キプロス島の首府であったパポスに、地方総督セルギウス・パウルスがいました。彼に福音を伝えたところ、魔術師であるバルイエスがそれを妨げようとして、そこで、パウロは聖霊に満たされて、彼をにらみつけ対峙します。そうしたら、バルイエスの目が見えなくなりました。それで、地方総督は信仰に目覚めます。

そして、「パウロの一行は」と始まっていますね。シリアのアンティオキアの教会から遣わされ、田舎は、「バルナバとサウロ(13:2)」という順番でした。そしてキプロスに来た時も、「バルナバとサウロ(7 節)」となっています。バルナバが、初めに出てきました。けれども、先の地方総督の前に立ちかかるバルイエスをにらみつけた時に、パウロがそれを行ったとあります。そして、今、「パウロの一行」となりました。この宣教の旅が、初めはバルナバが先に出ていましたが、今はパウロが全体を引っ張っています。

いろいろな意味合いがここにはあるでしょう。キプロスはバルナバの出身地ですが、アナトリア半島は、パウロの出身です。ギリシアという地方の西に、ここパンフィリア地方があります。そして、パウロに与えられている賜物もあり、自然に、パウロが率先して動いていると言えるでしょう。

バルナバは、柔軟に対応したと思います。彼は、「立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人」とありました(11:24)。

けれども、「ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった」とあります。マルコのことで、彼がなぜ離れてしまったのかは書かれていません。けれども、これが後の、バルナバとパウロの確執の元となります。二回目の宣教旅行の時に、バルナバはマルコを連れて行くと言い、パウロは、「パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうが良いと考えた」とあります(15:38)。これが激しい論争になり、それぞれ分かれて宣教の旅に出かけるようになりました。

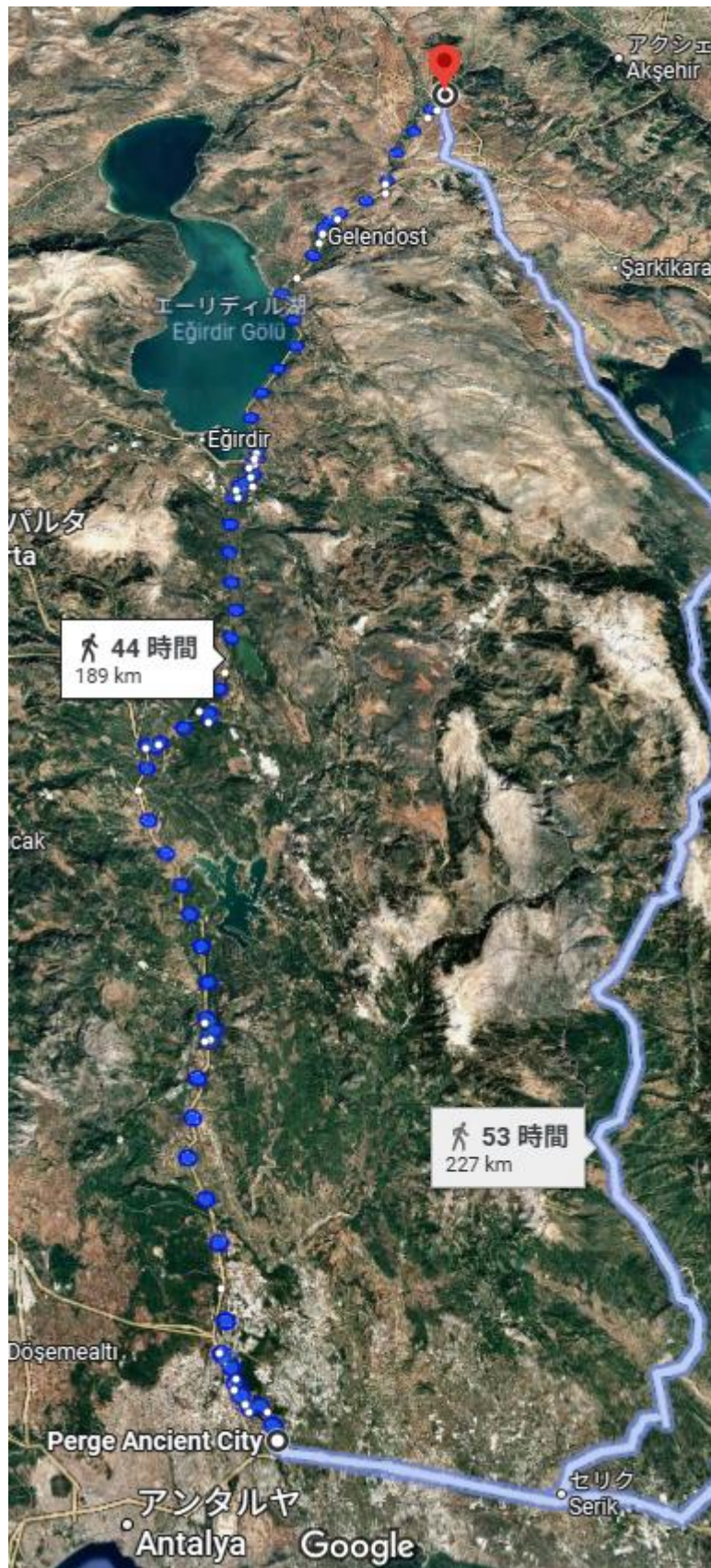
マルコにとってバルナバのほうが、はるかに近いのは当然のことです。そして、キプロスで激しい霊の戦いを彼は目撃し、これから、さらに過酷な状況が予測されます。14 節には、ペルゲからピシディアのアンティオキアにやって来た、とありますが、これは峡谷や渓谷を渡りながら、高地に上っていく長旅です。それで、プレッシャーに耐えきれなくなって、母のいるエルサレムに帰ったのかもしれませんが。まだ奉仕には整えられていない、霊的にも未成熟だったとも言えるでしょう。

^{14a} 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。

ペルゲという町は、今も観光地になっていて、ローマの大きな町の遺跡が残っています。平地で肥沃な土地であり、内陸に行くと陰しい丘があり、また流れている川は海に出るために航行が可能でした。ただし、パンフィリアは湿気が多く、熱く、疲労がたまりやすいところでした。そして、風土病としてマラリアがあります。それで健康を害した人々はいやされるために、内陸の高地に動くことがあったようです。もしかしたら、分かりませんが、パウロがマラリアにかかったかもしれません。

パンフィリアからピシディアに上り、それからイコニオンやリステラ、デルベなど彼らが旅をするところ一帯が、ガラテヤ地方になります。そこでパウロが、こんなことを述べています。「ガラ 4:13-14 あなたがたが知っているとおり、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。14 そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあつたのに、あなたがたは軽蔑したり嫌悪したりせず、かえって、私を神の御使いであるかのように、キリスト・イエスであるかのように、受け入れてくれました。」

そして、ガラテヤの人々は、「目をえぐり出して、私に与えようとさえしたのです(4:15)」と言っていますが、目がかなりやられていた可能性があります。手紙も口頭筆記で、最後に署名をする時に、「6:11 ご覧なさい、こんな大きな字で、私はあなたに自分の手で書いています」と言っています。目がかなり弱視になってしまったと考えられます。



このペルゲからピシディア地方のアンティオキアまでは、全行程で 190 キロぐらいです。標高 1100 メートルぐらいのところにあります。数々の峡谷と溪谷を渡り、すぐに水かさが増して、渡河するのはとても危険でした。また、強盗も多く出てきます。パウロが、コリント第二 11 章で、「何度も旅をし、川の難、盗賊の難」と言っていますが(26 節)、ここでの旅で起こったことも含めていると思います。そうした肉体にある棘を背負いながら、その弱さを背負いながら、それでもそこにある神の恵みに支えられ、宣教を行ったのでしょう。

パウロが、コリント第二 12 章で言っていますね。「12:9-10 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いとき

にこそ、私は強いからです。」弱さをかかえながらも宣教の働きをし、そこに神の恵みがあり、また苦しむ人を慰める働きもできるということです。

そして、ピシディア地方のアンティオキアに着きました。同じアンティオキアという名前の町なので混同しないように注意しないといけないのですが、ギリシアのセレウコス王国のセレウコス一世が、父のアンティオコスにちなんで付けた、同盟の町が他にもいくつもあるそうです。なので、地名を付けることによってくべすするしかありません。

私は 2019 年のトルコ旅行で、ここを訪れました。パウロの出身地タルソからカッパドキア、そしてここに来たので、彼らとは異なる道ですが、第二回目の宣教旅行では似たような路を辿っています。シリアのアンティオキアからは、キリキヤ峡門を経て、シルクロードの道に入ります。そして、アジアのエーゲ海に面するエペソに向かうのですが、その中間にあるのがピシディアのアンティオキアです。通商路になっており、貿易の中継地点です。



それから、ローマの植民都市になっています。ピリピが植民都市だったので、パウロたちが、彼らがユダヤ人で、ローマの慣習に反することを行っているという訴えで鞭うたれましたが、ローマのモデル都市です。けれども、ユダヤ人の居住は非常に多く、ユダヤ教の会堂、シナゴークで大きいものの跡が、しっかりと残っています。パウロが説教をしたシナゴークの跡で、私は、ここ 13 章の話を聞きました。かなり大きな遺跡で、トルコに点在している、ローマの都市の遺跡の中でも、かなり大きいものの一つに数えられると思います。

^{14b} そして、安息日に会堂に入って席に着いた。¹⁵ 律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのため

に何か奨励のことばがあれば、お話しください。」



キプロスでの働きでも見ることはできましたが、これから私たちは、パウロによる福音宣教の、とても詳しいことを見ることができます。今晚の学びで注目すべきは、パウロの宣教は、ユダヤ教の会堂から始まり、そこで、ユダヤ教の文脈の中で、神のことばを語り、そしてイエスを、イスラエルに来るべき救い主なのだと説いたことです。そこには、区別がありません。

多くの人が、旧約聖書の神と、新約聖書の神があたかも違うように語ることがあります。そこまでいかなくとも、旧約の時代に働かれた神は、昔の時代のことで、それは廃れて、今は新約の時代なのだと語ることが多いです。そういわなくとも、実質的に区別してしまっています。しかし、パウロは何度となく、自分が捕らえられて、カイサリアで弁明していた時に、同じユダヤ教徒である、ヘロデに対してこう弁明しているのです。「26:5-8 彼らは以前から私を知っているの、証言しようと思えばできますが、私は、私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してきました。6 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。」お判りでしょうか、全く区別していないのです。むしろ、律法と預言者で証しされている方がイエスである。つまり、完成なのだと証言しています。

安息日に会堂に入り、席に着いています。そして、「律法と預言者たちの書の朗読」があります。世界のユダヤ教は今に至るまで、一年で、律法、すなわちモーセ五書を朗読する習慣があります。そして、預言書も読みます。イエスがラビとして、ナザレの会堂でイザヤ書を読まれたのを思い出

¹ Bibleplaces.com

してください。そして、その、モーセ五書を一年かけて朗読するのを、パラシャと呼びます。世界中のどの会堂に行っても、決められた同じ箇所です。エルサレムの教会の監督である、ヤコブも、このパラシャについて、次のように述べています。「15:21 モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」これは、まだ今のような印刷技術もなく、ほとんどすべての人たちが、会堂で、神のことばを聞くこと以外には、聞くことは決してできないという背景があったからに他なりません。

そして、会堂司がパウロとバルナバのところに人を送って、こう頼みます。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことばがあれば、お話しください。」律法や預言者の朗読の後に、ラビに対して、何か奨励の言葉を言ってもらいます。これも、今に至るまでの習慣にあります。パウロはラビなので、そのようにして律法と預言者からイエスを宣べ伝えました。

この、朗読をして、また奨励のことばを述べるという習慣は、おそらく、ネヘミヤ記にある、神殿再建後の、律法朗読の時から始まったのではないかと思います。学者エズラが、律法の書を読み上げます。夜明けから真昼までやったことが書かれています。そして、レビ人たちが、読んで、またその意味を解き明かしたことが書かれています。「8:8 彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。」とあります。

この習慣が、ユダヤ人の会堂において引き継がれ、またテモテへの第一の手紙で、教会においても、同じような習慣で、みことばを教えていた様子がうかがえます。「4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」私たちの教会も、このようにして、聖書を読み、それを解き明かし、そしてその意味を明快にしながら、その教えを理解していくのです。

2A イスラエルの約束の方 16－25

1B 約束の地への導き 16－19

それで、パウロは奨励のことばを述べます。

¹⁶そこでパウロが立ち上がり、手振りで静かにさせてから言った。「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。

ここには、二つのグループがいます。イスラエル人と、また神を恐れる人々です。後者は、異邦人です。コルネリウスも、神を恐れる人でした。イスラエルの神を信じてはいるけれども、割礼を受けたり、律法を守ったりする改宗者とは違います。

¹⁷ この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。¹⁸ そして約四十年の

間、荒野で彼らを耐え忍ばれ、¹⁹ カナンの地で七つの異邦の民を滅ぼした後、その地を彼らに相続財産として与えられました。

パウロは、このように、イスラエルの民の歴史から話しています。これは、ユダヤ人たちがする、典型的なことであり、また、その歴史自体に、神ご自身の証しがあるからです。出エジプトの出来事こそ、イスラエルの民の誕生であります。そして、先ほどから話しているとおり、イエスをこれから宣べ伝えるのですが、それはあくまでも、結果なのです。つまり、イスラエルに対する神の取り扱いと、その約束があり、その約束の成就として、イエスが来られたのです。

そして、主の約束が、イスラエルの不従順によって反故にされていない面も大事ですね。四十年の間、荒野で彼らを耐え忍ばれました。彼らが反抗を繰り返すからです。しかし、神は彼らを全て滅ぼすことをなさらず、確かに新しい世代が、約束の地に入り、カナンの地の七つの民を滅ぼすようにされました。そして、割り当て地がイスラエルの諸部族に与えられます。

2B 王を立てられた方 20-22

²⁰ 約四百五十年の間のことでした。その後、預言者サムエルの時まで、神はさばきつかさたちを与えられました。²¹ それから彼らが王を求めたので、神は彼らにベニヤミン族の人、キシユの子サウルを四十年間与えられました。

歴史は、ある程度、区分できます。主がモーセによって、エジプトから荒野の生活を経て、約束の地に導かれました。そして、ヨシュアによって約束の地に入り、その後は、さばきつかさ、つまり士師たちによって、イスラエルを治めるようにされました。その最後の人、最後の士師がサムエルです。けれども、歴史は次に進みます。王を神が立てられたのです。そのきっかけは、民が周囲の異邦人と同じように、王を欲しいと願ったからです。

²² そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証して言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心にかなった者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。』

サウルは、いわば人々によって選ばれる王を、神が容認したような人です。けれども、憐れみによって彼が、主に忠実であれば受け入れられたものを、彼は、真実な意味で神を信じていたとは思えません。主が、ご自分の思いで選ばれたのは、ダビデでした。「見出した」とありますね。ノアの時代から、ずっと、主に用いられる器は、人が選ぶのでも、だれが推薦するのでもなく、神ご自身が見出し、選ばれます。

そして、ダビデが、「わたしの心にかなった者」と言われていますが、サムエル記を見ればわかり

ますが、彼は、いろいろな過ちを犯し、その最たるものがバテ・シェバとの姦淫、そしてその夫ウリヤを殺害したことでした。それにも拘らず、ダビデは、主の心になかった者です。これを意味するのは、パウロが後で宣べますが、「13:38-39 モーセの律法を通して義と認められることができなかったすべてのことについて、この方によって、信じる者はみな義と認められるのです」ということです。

ロマ 4 章でも、パウロは、ダビデは、行いとは別に義と認められたことを語り、彼が罪赦されたことを歌った詩篇を引用しています。「ロマ 4:6-8 同じようにダビデも、行いと関わりなく、神が義とお認めになる人の幸いを、このように言っています。7 「幸いなことよ、不法を赦され、罪をおおわれた人たち。8 幸いなことよ、主が罪をお認めにならない人。」」ダビデが、主の心を追い求め、罪を犯した時は、へりくだって悔い改め、主の懲らしめにも甘んじて受けました。そうした、主の前にいつも自分を置いているその姿勢が、主の前では、「わたしの心になかった者」と呼ばれたのです。

そして、「わたしが望むことをすべて成し遂げる」と、主は言われています。その筆頭が、ダビデの世継ぎの子が、永遠の神の治める国を受け継ぐことです。「Ⅱサム 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

3B ダビデの子イエス 23-25

ダビデの歴史までを話して、神の、世継ぎの子についての約束が、イエスにあって成就したのだと、パウロは、福音を宣言し始めます。

²³ 神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。

福音書で、イエスのことを、ユダヤ人たちが「ダビデの子」と叫んだのを思い出してください。それは、イスラエルの救い主についての呼び名です。ダビデの子にメシア、キリストが現れるということです。ですから、マタイ 1 章 1 節は、こう始まるのです。「ダビデの子、アブラハムの子、イエス・キリストの系図」新改訳ですと、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」となっていますが、ギリシア語では逆です。なぜならば、イエスがメシアであり、約束の、ダビデの子なのだということなのです。そして、そのダビデは、アブラハムの子孫であり、アブラハムに対する、「あなたの子孫によって、祝福される」という約束も成就している、ということです。

預言者たちは、初めに預言者ナタンに語られた預言を、何度となく繰り返し、キリストはダビデの子なのだと宣言しました。「詩 132:11 【主】はダビデに誓われた。それは主が取り消すことのない真実。「あなたの身から出る子をあなたの位に就かせる。」」イザ 9:6-7 ひとりのみどり

ごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。⁷ その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」

だからパウロは、ローマ人への手紙の冒頭で、こう言ったのです。「ロマ 1:2-4 ——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、³ 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、⁴ 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」肉によれば、ダビデの子孫から生まれる、ということです。そして、聖なる霊によれば、復活によって神の子として公に示されたとも言っていますが、これは、ここの説教の後半部分で、パウロは詳しく論じます。

²⁴ この方が来られる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、悔い改めのバプテスマをあらかじめ宣べ伝えました。

ここが、とても重要なつなぎです。士師の時代、最後の士師が預言者サムエルで、そこから王が立てられたと同じように、預言者たちの最後の預言者が、ヨハネです。そのヨハネが、自分自身ではなく、イエスを指し示したというつながりであります。ヨハネは、ユダヤ人たちが、当時の宗教指導者が一部、認めなかっただけで、だれもが認める預言者でした。彼がもしかしたら、約束のメシアからかもしれないとまで思われたのです。そして、イエスが公に現れても、なおヨハネの弟子としてついて行った人たちがいたほどです。

イエスが神殿の境内におられた時に、指導者らがやってきて、何の権威によって、これらのことをしているのか」と尋ねた時に、主は、「マタ 21:25a ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」と逆に聞かれました。彼らは、自分たちで論じ合いました。「21:25b-26 もし天からと言え、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。だが、もし人から出たと言え、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者だと思っているのだから。」こうやって、人々はヨハネを預言者として認めていたのです。

²⁵ ヨハネは、その生涯を終えようとしたとき、こう言いました。『あなたがたは、私をだれだと思っているのですか。私はその方ではありません。見なさい。その方は私の後から来られます。私には、その方の足の履き物のひもを解く値打ちもありません。』

このヨハネが、自分がメシアではない、私はその方の足の履き物のひもを解く値打ちもない、と言ったのです。これは当時の、ユダヤ教の弟子たちについての決まりで出てくるものだそうです。人々は、ラビについてそれで弟子になります。そしてラビは、弟子たちにいろいろ言いつけます。し

かし、ここまで要求してきたら、あまりにも屈辱なのでなくてよい、ということです。それが、足の履き物のひもを解くことだったそうです。ということは、それさえもする値打ちがないとまで、ヨハネが言っています。ここで、ヨハネは最後の、旧約時代でいる預言者だけれども、そのヨハネよりも、はるかに優れた方が、救い主イエスなのだということです。

こういうつながりでした。パウロは続けて、イエスご自身の生涯を宣べ伝えます。そこでの中心は、十字架につけられ、そしてよみがえったということです。これは、次回、見ていきましょう。